

科学屋

かちくや



川口 寧(カワグチヤスシ)
獣医学博士 40歳

略歴

平成4年東京大学農学部獣医学科卒業／平成7年東京大学農学生命科学研究科博士課程修了／平成7年-9年シカゴ大学博士研究員(Prof. B. Roizman)／平成9年-14年東京医科歯科大学・難治疾患研究所、助手・講師・助教授／平成14年-17年名古屋大学大学院医学系研究科・助教授／平成14年-17年JSTさきがけ研究21・研究者(兼任)／平成17年より東京大学医科学研究所感染症国際研究センター・准教授／学部4年生で研究を始めて以来、18年間、一貫してウイルス研究を続けている。



Prof. Bernard Roizmanと筆者の研究室の学生。2年前の国際学会にて。Bernardは、最初はそっけなかったが、Yasushiの学生だと告げたら、「君たちは私の孫だ」と喜んで写真撮影に応じてくれた、と学生から聞いた。

「若き?ウイルス屋?のつぶやき」

私は大学時代、軟式野球部に所属していた。野球部の練習は朝8時から週4回あった気がするが、同時に徹夜(22時から6時まで)のウエイターのバイトを週3回やっていた学生時代の自分を、現在では驚嘆して思い出している。私が所属していた大学では、教養学部(大学1、2年)での成績によって学部・学科が決定される。私が所属していた学類だと、成績が悪いと、動物園(獣医学科)に行くか、漁師(水産学科)、または、木こり(林産学科)になるんだと言われていた(現在では、状況がかなり異なるらしいが)。当然私の成績が良いはずもなく、「3つの中だったら動物園かな?基礎医学にも興味があるし」とあまり深く考えずに獣医学科に進学した。しかし、獣医学科に進学してすぐに「しまった!」と気付いた。当時、私は動物が嫌いだったのである。しかし、獣医学科で動物を扱わないはずがない(最初の解剖実習で思い知らされた)。そこで、学部4年生の研究室配属では、できるだけ動物を扱うことに縁がなさそうな研究室を探した。これまた短絡的に、「ウイルスの研究だと、動物を扱わないだろう!？」と思いこみ、獣医微生物学教室を希望した(もちろん私の思いこみが大きな勘違いであったことは、配属後すぐに動物当番に組み込まれたことから判明した)。このように、時の流れに身をまかせ過ぎた結果、図らずも私のウイルス研究が始まった。早いもので18年前の話である。ニュースレター第一号で小柳先生が「ウイルス屋」という言葉が使われたが、私もこの言葉が好きである(私がウイルス屋と認識されているかは別問題であるが…)。

学部、大学院と6年間、見上 彪教授(現、内閣府食品安全委員長)の指導を受けた。私のような不真面目な学生でも、研究室配属後はその気になり、いつの間にかプロの研究者を目指すようになっていた。私のような先輩や後輩が、同門では数多くいる。この事実は、研究者を目指す学生を育てるのは、指導者がある程度(大きな?)役割を果たしていることを示唆していると私は思う。研究室に配属される若い学生には、自分の進む方向性において最初から確固たる信念をもてる者は少ない。この現状を認識した上で、サイエンスの魅力をうまく伝え、学生をその気にさせる。見上先生は簡単におっしゃるが、なかなか真似はできない。

博士課程修了後は、最先端のウイルス研究を体験したいと思い、シカゴ大学・Bernard Roizman教授の研究室に留学した。Bernardは、ヘルペスウイルス研究界のゴット・ファーザー的存在の研究者である。留学中のある日の出来事。良さそうな結果を出しても、出してもなかなか論文にまとめようとしないBernardに、「私には論文が必要です!」と主張したら、「Yasushi, 論文の数は重要ではない。良いサイエンスすることが大事だ。」と、一言。私の記憶に残っている印象深いBernardの言葉である。このBernardの教えを十分に理解し、それを実行しているかは、現在の私でも自信がない。ただ、1つ心がけていることがある。それは、サイエンスにおいて「粘る」ことである。

帰国後の話を書こうと思ったら、紙面が尽きてしまった。別の機会にしたい(西山先生すみません)。最後に、学生時代に所属していた運動会(野球部)では、「後輩は先輩を追い抜くことが礼儀である。ただ、その際、先輩に対する尊敬の念を忘れてはいけない」と教わった。これは、サイエンスの世界にも通ずることであり、先人達を越えていかなければサイエンスの進展は望めない。私もお世話になった先生方を越えるように努力したい。かなり、高いハードルというのは十分承知しているけれども…。

東京大学医科学研究所感染症国際研究センター
川口 寧